高校教師
座談会

# 「国際交流」から「国際行動」へ――今、高校現場に求められる変化

グローバル社会に対応できる生徒を育てるために、高校教育の現場はどのように変わっていくべきか。グローバル化を見据えた教育に力を入れる3校の先生方に、実践内容を踏まえた今後の展望をうかがった。

## グローバル化に対応する各校の教育の特色

**――本日はよろしくお願いいたします。まずは各校の教育の特色についてお聞かせください。**

**笠間**　神奈川県立横浜国際高校は、2008年に神奈川県立外語短期大学付属高校と神奈川県立六ツ川高校が統合して開校した国際情報科の単位制専門高校です。専門高校としては県下で唯一、学力向上進学重点校に指定されていて、専門科目を学びながら進学指導にも重点を置いているという特徴があります。

教育課程のうち、専門科目の占める割合は3分の1ほどで、現在23人のネイティブの教員が在籍しています。英語はオールイングリッシュの授業を行い、1年生から4技能のバランスの取れた指導を心掛けています。6か国語の第二外国語を設置しているのも特徴で、1年生は必修、2年生以降は選択ですが、学校としては3年間の継続履修を原則としており、約7割の生徒が3年生まで履修します。

外国語の他、情報伝達能力の育成にも力を入れています。プレゼンテーションなどのコミュニケーション能力を伸ばし、英語を始めとした外国語での情報発信力を育成しています。

**三上**　千葉県立長生（ちょうせい）高校は、千葉県茂原市にある県の進学重点校です。1学年8クラスで、そのうち1クラスが理数科です。

本校の教育の特色は、10年度からSSHの指定を受けていることです。理数教育に力を注ぐと同時に、新学習指導要領を先取りして英語はオールイングリッシュの授業を行うなど、英語力の強化を始めとした国際性の育成が、SSHの取り組みの柱となっています。

我々が常に念頭に置いているのは、SSHの指定によって生徒の学習に偏りが生じ、進学実績が下がらないようにすることです。英語を英語で学んだり、プレゼンテーション能力を育てる教育を取

神奈川県立横浜国際高校
副校長
**笠間待男**先生
Kasama Matsuo

横浜国際高校◎国際化・ICT化の進む社会で活躍できる人材の育成を目的とし、2008年に開校した国際情報科単位制の専門高校。世界6か国（＊）との姉妹校交流を行っている。県の学力向上進学重点校。

＊オーストラリア、ドイツ、フランス、スペイン、中国、韓国の6か国

新潟県立国際情報高校
教務主任
**鈴木信行 先生**
Suzuki Nobuyuki

国際情報高校◎1年生は共通科目を学び、2年生から国際文化科・情報科学科に分かれる。充実したキャリアガイダンスなど、開校当初からキャリア教育を重視。学生寮を完備しており、全県から生徒が集まる。

り入れたりすることと並行して、難関国公立大に合格できる受験対応力を育てることを目指しています。

**鈴木**　11年度に20周年を迎えた新潟県立国際情報高校は、新潟県の学力向上をけん引する期待を担い、全県から生徒を募集できる高校として設立され、国際文化科、情報科学科という二つの専門学科を擁しています。

本校の校是は、一人ひとりの個性を生かした丁寧なキャリア教育です。現在のようにキャリア教育の重要性が叫ばれる前から力を入れており、担任の親身な指導によって生徒に将来設計力を付けて、難関国公立大を始めとする希望大学に進学させることに一定の成果を収めてきました。

もともと県の新しい教育のパイオニアとして設立されたことから、新しいことにチャレンジする精神が強いのが本校の特色です。13年度を目標として、高校卒業後にハーバード大やマサチューセッツ工科大など海外の大学に直接進学する「海外大学進学コース」の設置準備を進めているのも、そうした校風の表れといえます。このコースを設置する背景には、グローバルリーダーを育てたいという思いが強くあります。

千葉県立長生（ちょうせい）高校
教諭
**三上正弘 先生**
Mikami Masahiro

長生高校◎1888（明治21）年開校の伝統校。2010年度からSSHの指定を受け、学習指導要領の枠を超えた先進的な学習プログラムを提供。部活動も盛んで8割以上の生徒が所属している。

## プロジェクトを遂行するツールとして英語を位置付ける

**――グローバル社会の中で活躍できる人材を育てるために、高校にはどのような教育が求められているとお考えでしょうか。**

**鈴木**　高校で必要な基礎学力の習得は欠かせません。学習指導要領で求められている学力をしっかり育成することが、基本になると考えています。その上で、自国と他国の文化を相対的に見られる視野の広さや、異なる文化的背景を持つ人々を動かす発信力やリーダーシップなどが必要になるのではないでしょうか。

キャリア発達の視点からも、高校生と大学生の夢の描き方は異なります。高校生には高校生段階で必要となる将来設計力や情報収集力があります。具体的には、大きな将来のイメージの下、大学で何を学びたいかをしっかりと描く力です。高校時代にそれをきちんと育てておくことが必要でしょう。その力をベースにして、大学ではグローバル社会の中でどのように活躍するかという将来設計をより具体的に立てられるようになると考えています。

**笠間**　大学教育を見据えてベースをしっかりとつくることは、私も重要だと思います。更に、机上で学んだり、映像で見たりするだけではなく、実際に他国の人に会い、違いを知るといった体験を、高校時代に出来るとよいと思います。

本校では1年生の夏休み直前に

箱根で日本語禁止の英語合宿を行い、10人に1人の割合でネイティブの教員が付いて、英語を話すことに慣れさせます。また、6か国7校の海外姉妹校との交流に力を注いでおり、約半数の生徒が姉妹校を訪問します。その他の生徒も、本校で受け入れた留学生やネイティブの教員とコミュニケーションを取る機会が十分にあり、先入観を取り払って他国の文化を理解します。そうした体験がベースとなって真の国際理解が出来るようになり、グローバル社会で通用する人材が育つと考えています。

**三上**　グローバル社会で通用する人材を育てるために、英語力の育成は必須です。語学が身に付くためのポイントは、モチベーションとニーズだと思います。モチベーションを高め、ニーズを喚起するには、英語を学ぶこと自体を目的とするのではなく、英語を「何かのプロジェクト」を遂行するためのツールとして位置付ける必要があります。プロジェクトの目標を達成することが学びのモチベーションとなり、目標達成のために英語力を付けることがニーズとなるのです。

## 失敗を乗り越える体験が大きな成長のきっかけに

**笠間**　異文化の人とコミュニケーションを図るためには、物事を論理的に伝えることが不可欠です。そこで、本校ではプレゼンテーション能力の育成に力を入れています。2年生の段階では日本語で行い、論理的に筋道を立てて発表する力を高めた後、3年生になってから英語で発表をする機会を設けています。

**鈴木**　本校は地方部にあり、地域的にあまり海外研修が盛んではありませんでしたが、本校では開校当時から1学年約160人中100人以上の生徒がアメリカやオーストラリアで10日間のホームステイを体験しています。それに向けて1年生から英語の授業を組み立て、日本の文化を紹介するプレゼンテーションの用意をします。また、帰国後は、姉妹校から留学生を受け入れて交流しています。

**三上**　本校では、1週間の台湾研修を行っています。更に、テレビ会議システムを通じたオーストラリアの高校との交流を、12年2月に実施します。

　グローバルに活躍するためには、英語をツールとして、他国の人々に向けてプレゼンテーションできる力が求められます。プレゼンテーションでは、まず自分の考えを分かりやすく説明し、質疑応答では予期せぬ質問にも英語でレスポンスをする力が必要ですが、これらは社会で求められる力にかなり近いと考えています。

　そこで、1年生からプレゼンテーションの指導を始め、2年生では自由テーマの個人研究について全員に英語で発表をさせます。その中から代表を選び、台湾やオーストラリアとの交流の際にプレゼンテーションをする場を設けています。校内発表では上手に出来たのに、本番で失敗してしまう生徒も少なくありません。しかし、悔しい思いをして、それを乗り越えていく体験は成長の大きなきっかけになります。

## 社会や生徒の変化に合わせ教師も変わる必要がある

**三上**　海外でプレゼンテーションをする力の源となっているのが、「サイエンス・イングリッシュ」の授業です。海外の理科のテキストを使い、英語でその内容を教えるという取り組みをしています。

理科の難易度は高校1年生以下のレベルで、生徒にとっては英語で理科の復習をするという感じです。

実施前は、英語教師が理科を教えられるのかという議論もありましたが、分からない内容があれば理科の教師に聞けばよいわけで、実際に始めてみると困ることはほとんどありません。

一般に英語のテキストは文化的な内容が多く、理科的な内容はあまり含まれていません。そのため、理系の生徒から大学入学後に単語が分からずに苦労すると聞いていましたし、大学側からも「高校でもっと理科的な内容を英語で教えておいてほしい」という要望がありました。英語教師にとってはチャレンジとなりますが、そうしたチャレンジはどんどんすべきだと思います。理科の教師にもチャレンジしてもらうために、チーム・ティーチングで入ってもらい、英語で授業をしてもらったこともあります。

**鈴木**　社会の状況や生徒の要望の変化に応じて、教師も変わっていくことは不可欠です。これまでは、英語が得意で世界に出たいという生徒に対して、基本的には国内の大学に進学した上で留学するという道筋を示していました。しかし、グローバル化が進む中、高校卒業後に、直接海外の大学に進学するという選択肢を用意する必要性を感じるようになりました。本校で始まる「海外大学進学コース」は、私たち教師の指導のあり方を見直すよい契機となっています。

といっても、指導が大きく変わるわけではありません。これまでも生徒が「東京大に行き、社会に貢献したい」と言えば、教師はどうすればその目標を実現できるかを調べて支援してきました。基本的にはそれと変わらず、「アメリカの大学で勉強して、世界に貢献したい」という生徒に担任が真剣に向き合い、必要な支援をするという考え方です。そのためには、教師の研修も必要になると考えています。

**――「海外大学進学コース」の具体的な教育内容を教えてください。**

**鈴木**　まだ決まっていない部分も多いのですが、校内でＴＯＥＦＬの試験を受けられる体制をつくる、サイエンス・イングリッシュを始め、ＳＡＴ（アメリカの大学進学適性試験）に対応できる力を校内で育てる、英語エッセーのライティングを指導する専門科目を設置したり、海外大学研修を行うなどの対応を検討しています。

こうしたコースが新設されれば、他校に進むつもりだった生徒が本校への入学を検討するケースもあるでしょう。潜在的なニーズは十分にあると考えています。

## 国際交流ではなく国際行動が求められている

**笠間**　教師が変わる必要性は、私も実感しています。私の専門教科は数学ですが、前々任校の姉妹校交流の付き添いで海外を訪問してホームステイを体験し、カルチャーショックを受けました。本校の姉妹校交流でも、全教科の教師が持ち回りで付き添いをし、生徒と同じ体験をするようにしています。教師がグローバル社会に適応する必要性を実感してこそ、学校全体が同じベクトルを持つことが出来るからです。

**三上**　私がグローバル社会で通用する力の育成にこだわるようになったきっかけも、やはり海外体験でした。イギリスの大学の研修に参加した際にアフリカやヨーロッパの教師と交流し、英語が話せれば世界中の人と実りのあるコミュニケーションが出来ると実感し、こういう体験が生徒にも必要だと感じました。そうしたことを感じ取るためにも、教師が生徒の付き添いで海外に行く時は、ホームステイをするなど生徒と同じ体験をすべきだと思います。

**笠間**　日本の置かれた状況を理解することは、生徒にとっても教師にとっても重要でしょう。アジアの優秀な人材との競争など、実際に外に出てみなければ分からないことはたくさんあります。

私たちに今求められているのは、単なる「国際交流」ではなく、実際に行動して自分の力を試す「国際行動」です。生徒も教師も、今まさに「あなたに何が出来るのか」が問われているのではないでしょうか。